

人 ④ 農婦の目で蒲原を綴る

青木 きい さん
木場下組 五十九歳

青木きいさんの投稿が初めて新聞に載ったのは昭和二十四年。題は「農婦の一生」だった。戦後、男女同権が唱われ、ようやく女性が選挙権を持った時代だ。でも、百姓の嫁やかあちゃんばは戦前と同じようなもんでした。牛のように働く毎日。発言権もなく、働くだけの一生のような気がして、これでいいのかな」と当時二十一、二歳の青木さんは思った。

農薬だ。青木さん自身、昭和三十一年代の農薬のせいでの慢性農薬中毒症に悩まされている。農作業はほとんどできない。農家の主婦なのに土から離れてしまった」と言う

青木さんの望みはやはり土に還ること。「いつか無農薬の畑をうねでも作りたい」。

昭和五十九年五月から朝日新聞新潟版に「蒲原平野から」という



自宅のガス井戸で大根を洗う青木さん。ガス井戸も蒲原特有の風景だが近年は地盤沈下対策のため見られなくなった。新潟日報や朝日新聞の投稿欄でよくお名前を見うける青木さんだ。

随筆を書き始めた。農薬や暮らしの移り変わりを、蒲原の四季を織りまぜ綴ったものだ。好評を博し、四十回にわたる連載になった。昔のことを書いただけでいいのに。反響が大きかったのはどの地方でも農村が大きく変わったからでしょうか。

農婦の一生の中で、農婦がはだしてなくなったとき、農婦は解放される、と書いたという。もうはだしの人はだれもいません。それどころか、農村には農婦と呼べる人が少なくなってきたのです。

いまもこれでいいのかなと思いつつ、取材を終え、「一つなじらね」とみかんを差し出す青木さんの手を見ると、鉛筆やペンではなく、かまやくわを長い間持ってきた手だった。

(文・五十嵐広報担当)

戦争のこと。「文章は下手だし、教育も受けていないのに。恥ずかしい。よく書けたものだと思いき」と青木さん。「わたしだけでなく皆さん悩んだり考えたりしてらんです。それを書くことでわたしは満足してきたのです。だから、投稿は没になってもいいと思ってるし、掲載された新聞もほとんど保存していない。

ほんの一冊

手と目と声と (理論社)

灰谷健次郎

「兎の眼」「太陽の子」の作者の「水の話」他5編の短編を取めた作品集です。「手」という作品では、女子中学生が旅に出て目にするものが、その中学生の目を通して綴られるのですが、心の目を開いているとこんなにもいろいろなことが見えてくるのかと思ひ知らされます。出会いを出会いとして受けとめるには、まず自分を見なければならぬのかもしれない。

ともすれば日常生活の中で見落としてしまふような出来事にしっかりと目をすえて、真実を見ようとする姿勢は心をうさびしいのですが、強さに裏うちされたやさしさを忘れてはいけません。

いつもの風景が、ちよつと違って見えてくる、そんな本です。

(紹介者 中山佳奈恵)

前年		今年	
前月比	同月比	前月比	同月比
22,844 (+34)	[+328]	22,844 (+34)	[+328]
11,247 (+14)	[+174]	11,247 (+14)	[+174]
11,597 (+20)	[+154]	11,597 (+20)	[+154]
6,012 (+16)	[+140]	6,012 (+16)	[+140]

12月末日現在 (前月比) 65 43
入 転 出
65 43

12月1日～末日 21 13
出生 転出
21 13
9

12月1日～末日 13 9
出生 転出
13 9
9



● 来月号の表紙

来月号の「決算」を特集します。また、今後は「生涯教育図書館」史料館などの文庫を紹介したいと思います。取材のときはぜひご協力をお願いします。

● 今月号の表紙

実はこの原稿を書いている時点では、まだできていないのです。取材に協力してくれた皆さん、ありがとうございました。写真もまだ現像されていないのです。写りが悪かったら、編集局の責任です。今年は、原稿を昨年より一日は早く書き上げることと写真の腕を上げることが編集者の抱負です。

編集室のすぐ上の「人」シリーズは四年前に始めたのだが、そのとき、真っ先に頭に浮かんだのが青木きいさんである。そのころ農薬中毒で体調を崩されていたと聞いた。慢性農薬中毒症の怖さは、毒素が体内に蓄積されるため完治しにくく、症状が頭痛、吐き気、高熱など様々で病気がと気がない人も多いというのだ。「一生この病気が聞わなければならぬ」と青木さんは言う。

「いまの農業は安全」と言っている。いまは安全でも将来も安全とは言えない。でもいま農業を使わなければ農業はできないのが現実だ。いつまでも優先している。

▼青木さんが朝日新聞に連載した「蒲原平野から」は、現在編集中の記念誌に掲載する予定。四月には皆さんに読んでいただけたらと思う。▼障害に関する投稿を頂きました。次号でご紹介します。▼新潟県広報コンクールで広報くろさきが最優秀賞(人口一万人以上の町村)を受賞しました。レポーターをはじめ、取材や寄稿など皆さんのご協力のおかげです。あらためて、今後よろしくお願ひします。

